

◎教皇がケニアからウガンダへ

【C J C = 東京、11/30/2015】教皇フランシスコは11月27日午前、最初の訪問国ケニアのナイロビ・カンゲミ地区のスラム街を訪問。その後、カサラニ・スタジアムで若者たちとの集いを行った。

同日午後、ケニアを後にし、第2の訪問国ウガンダに移動、ウガンダのエンテベに到着した教皇は、空港での歓迎式の後、エンテベ市の大統領官邸でヨウェリ・カグタ・ムセベニ大統領と会談、要人との出会いを行なった。夕方には首都カンパラ郊外のムニョニョでカテキスタや教員らと会見、その後カンパラ市内に入った。

28日午前、教皇はカンパラ近郊ナムゴンゴの聖公会とカトリックの殉教者聖地を訪問した。カトリックの殉教者聖地ではミサを司式。午後はカンパラのココロ地区で若者たちとの出会いを行った。また、貧困者のためのケア・センターを訪問、教会関係者と交流した。

◎法王、モスクで融和訴え 宗教対立の中央アフリカで

【ナイロビ 共同通信社、11/30/2015】アフリカ歴訪中のローマ法王フランシスコは30日、最後の訪問国、中央アフリカの首都バンギで、キリスト、イスラム両教徒が激しく対立する地区にあるモスク（イスラム教礼拝所）を訪れ、「宗教の違いが対立の本当の原因ではない」と指摘し、両教徒は「兄弟だ」として融和を呼び掛けた。

法王はイスラム教徒や指導者らの前で演説し、「共に宗教の名をかたった憎しみや復讐、暴力と決別しよう」と語った。法王は同日、歴訪を終え、帰国の途に就いた。

宗教の神学

Overview

- ・ 宗教の神学の背景
- ・ 宗教多元社会の歴史的経緯と今日の課題
- ・ 宗教的多元性に対する神学的応答

宗教の神学の背景

「宗教の神学」の主題

- ・ キリスト教は、他の諸宗教をどのように理解するのか。
- ・ キリスト教は、他の諸宗教に直面して、どのような自己理解をするのか。
- ・ **宗教的多元性**を神学的にどのように解釈するのか。
- ・ 宗教間対話はなぜ必要か。また、どのようにすれば促進することができるのか。

宗教が関係している紛争の例

- ・ 北アイルランド（プロテスタント、カトリック）
- ・ 中東（ユダヤ教、キリスト教、イスラーム）
- ・ ボスニア（カトリック、セルビア正教会、イスラーム）
- ・ インド（ヒンドゥー教、イスラーム、キリスト教）
- ・ インドネシア（イスラーム、キリスト教）
- ・ スリランカ（仏教、ヒンドゥー教）
- ・ スーダン（イスラーム、キリスト教）
- ・ 米・同時多発テロ（イスラーム、キリスト教）

ただし、宗教が紛争の「原因」ではないことに注意！

宗教間対話について

- ・ 様々な宗教間対話 (**inter-faith dialogue**)
- ・ 世界教会協議会 (WCC) が主催する宗教間対話
- ・ 世界宗教者平和会議 (WCRP)
- ・ 比叡山宗教サミット
- ・ 私の経験
- ・ 仏教・神道との対話：京都・宗教系大学院連合 (www.kgurs.jp)
- ・ 一神教間の対話：同志社大学 一神教学際研究センター (www.cismor.jp)

宗教多元社会の歴史的経緯と 今日の課題

キリスト教の形成と宗教的多元性

- ・ イエス運動からキリスト教へ
- ・ ユダヤ教との関係
- ・ ギリシア・ローマの宗教との関係
 - ・ 例1：アテネでのギリシア人たちの議論（使徒言行録 17:16-34）
 - ・ 例2：偶像に備えられた肉（コリントの信徒への手紙一 8:1-13）
- ・ コンスタンティヌス体制以降のキリスト教
- ・ 313年、キリスト教はローマ帝国の公認宗教、強力な「宗教的一元性」の形成

宗教的多元性の土壌としての社会の「世俗化」

- ・ 世俗化とは？
- ・ もともとの意味は、宗教改革の時代に、土地が教会の支配から解放されること。
- ・ キリスト教の社会的影響力が減退する現象。
- ・ 世俗化がもたらしたもの
 - ・ 政治的には民主主義、経済的には資本主義、社会システム的には官僚制、文化的には科学技術への信頼を生み出した。世俗化は西欧社会の近代化の原動力となった。
 - ・ 「私的領域」と「公的領域」の分離 → 政教分離

欧米における宗教間対話の必要性

- ・ ユダヤ教、イスラームとキリスト教の対話は歴史的必然性を有している。
- ・ **反ユダヤ主義**（第二次世界大戦時におけるホロコースト）、**十字軍**
- ・ 9.11同時多発テロ事件（2001年）以降の**イスラモフォビア**（イスラムへの憎悪感情）の拡大
- ・ ムスリム移民の増加
- ・ 2005年、シャルリー・エブド襲撃事件（1月）、パリ同時多発テロ事件（11月）。

宗教的多元性に対する 神学的応答

宗教的多元性に対する3つの類型

- ・ 排他主義（exclusivism）：救いは自宗教においてのみ
- ・ 包括主義（Inclusivism）：他の宗教にも救済の可能性
- ・ 多元主義（pluralism）：すべての宗教は基本的に対等

排他主義

- ・ 伝統的なカトリックの宗教理解：「教会の外に救いなし」
- ・ プロテスタントの保守派
- ・ 特徴
 - ・ キリスト教と他宗教との間の「断絶」を強調
 - ・ 聖書の権威を強調——逐語靈感説
 - ・ キリスト論を強調——K・バルトへの言及

包括主義

- ・ 第二バチカン公会議以降のカトリック
- ・ 宣言「我らの時代に」（*Nostra aetate*, 1965）で他の宗教の真理性を否定しないことを確認
- ・ 1960年代以降の世界教会協議会（WCC）における他宗教理解
- ・ 特徴
 - ・ 救済は他の宗教においても可能（神の恵みの普遍性）
 - ・ キリスト教と他宗教の間には包括的な上下関係があると考えられる。

多元主義

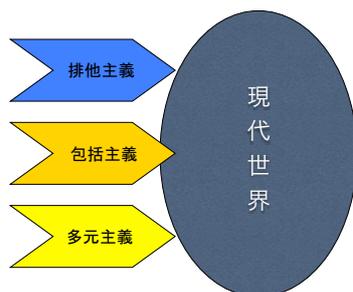
- ・ 宗教的多元性は恒常的なものであり、それはいかなる単一の宗教にも取って代えられることはない。
- ・ 諸宗教の中には固有の真理契機がある（ただし、すべての宗教が救済的意義を持っているわけではない）。
- ・ いかなる宗教も、最終的・絶対的・普遍的な真理を保持しているとうことはできない。
- ・ キリスト教信仰にとってイエスは独特の意味を持っているが、その独自性は排他的な形で優越性・超越性と結びつけられるべきではない。

多元主義モデルの問題点

- **置換主義** (supersessionism)
- 例：ユダヤ教とキリスト教の関係
「古いイスラエル」と「新しいイスラエル」
「旧約聖書」と「新約聖書」



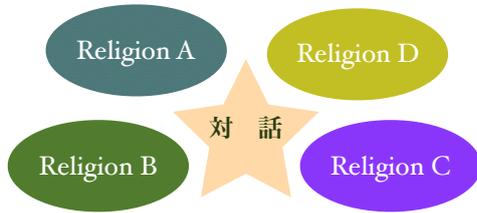
多元主義モデルの問題点



宗教間対話・宗教の神学の課題

- ・ 他者の宗教的感情の尊重（→「表現の自由」との緊張関係）
- ・ 対話を阻害する力（暴力、紛争）の分析
- ・ （対話を求めない）原理主義的グループとの対話
- ・ 宗教内対話 (intra-faith dialogue)：保守派とリベラル派・穏健派の対話
- ・ 世俗社会との対話：共通の社会問題、地球規模の問題への取り組み

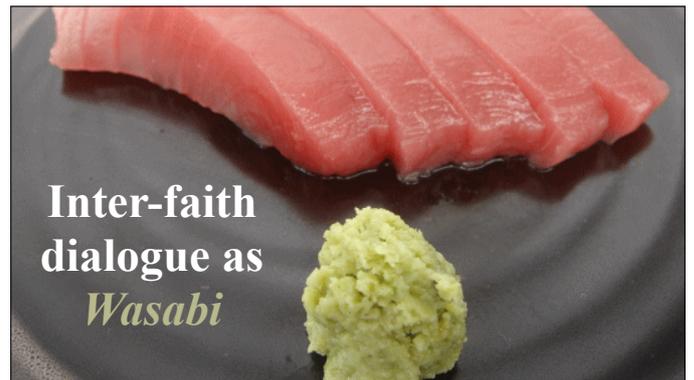
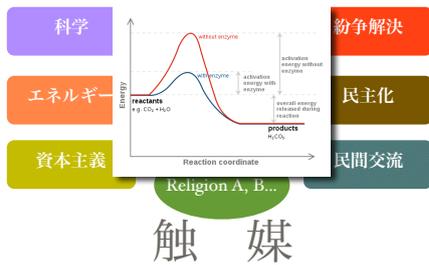
宗教間対話 Type 1



宗教間対話 Type 2



宗教間対話 Type 2



【参考文献】

- ・ ジョン・ヒック『宗教多元主義——宗教理解のパラダイム変換』（間瀬啓允訳）法蔵館、1990年。
- ・ ゲイヴィン・デコスタ『キリスト教は他宗教をどう考えるか——ポスト多元主義の宗教と神学』（森本あんり訳）教文館、1997年。
- ・ 小原克博『宗教のポリティクス——日本社会と一神教世界の邂逅』（晃洋書房、2010年）、第5章「宗教の多元化と多元主義——宗教の神学の課題」